

繪葉書帖

尾道文化遺産実地調査委員会謹製

尾道文化遺産マップ 5

繪葉書帖 【旧尾道周辺部】



カテゴリ分類

風景遺産



民俗遺産



歴史遺産



石造遺産



建築遺産



自然遺産



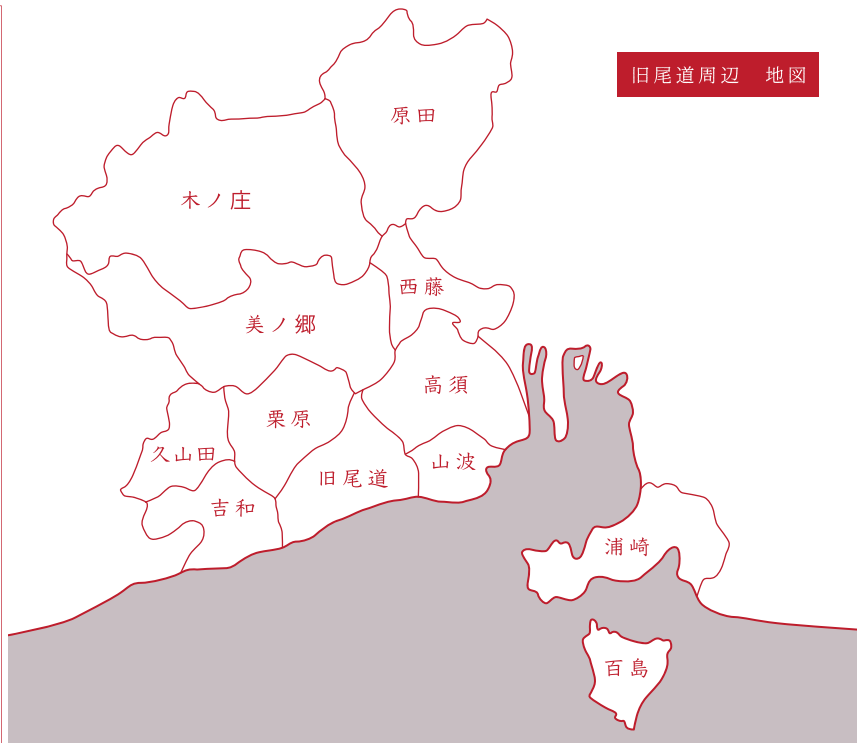
祭礼遺産



鉄道遺産



旧尾道周辺 地図



尾道文化遺産マップの趣旨

文化財の指定にはないものの、地域の歴史・民俗・景観を伝える地域遺産として、守りたい、伝えたいものにスポットを当てるものです。

初回の港町（尾道旧市街）・里山（御調）編、

二作目の因島編（生口島の中の旧因島市域含む）、

三作目の向島編（東西及び岩子島）、四作目の芸州瀬戸田編を経て、

ラストは旧尾道市域の内、中心市街地（旧尾道町域）を除く全域を対象に、

地域遺産を拾い集めてみました。

ここでピックアップされたものはあくまでも一部に過ぎず、

まだまだ掘り起こせば埋もれた地域遺産は見出せると思います。

知られざる尾道スポットを探訪する、ちょっとディープな絵葉書帖。

探訪の中で、自分だけのマイ尾道絵葉書を切り撮ってみてください。

01 尾道西宮からの眺望

【吉和】

尾道市域の西方、吉和エリア（旧吉和村）の氏神様・幣多賀八幡宮（吉和八幡神社）は、古くは尾道西宮とも通称された歴史あるお宮。

多賀とは近江の国（滋賀県）の多賀大社を指し、こちらの祭神である多賀の大神（イザナギとイザナミの夫婦神）を祀り、この神に奉幣（ほうへい）：捧げ物を奉（たてまつ）るとの意味からの社号となる。後に八幡神が合祀されたところから、二つの神様が並び立つその名を見るに至った。

漁港広がる正徳浜を見下ろす高台に鎮座し、その境内からは対岸に向島西端、赤い向島大橋で繋がる岩子島（いわしじま）、更にその向こうに因島大橋と、ちよつと絵になる風景を望む事ができる。





望眺ノラカ宮西道尾 壺
Heritage of Onomichi Suburban Areas

射場いばくハレとケが混在する空間く



【吉和】

幣多賀八幡宮の宮下は、人家密集の迷路のような路地が広がるが、参道入口は開けた空間となっている。「射場」と呼ばれるその空間は、海賊の襲来に備えて、漁民が弓矢の練習をしていた場所、故に弓を射る場、射場となつたと、傍らの古い案内看板が教えてくれる。

射場にはその昔には鳥居が建つていたと言うから（地元古老談）、氏神様のまさしく玄関口であつたようだ。

祭礼の際には神輿みこしを安置する御旅所おたびしよが仮設で生まれ（現在は境内で組む）、更に昔には神楽や相撲もあつたと古老の思い出話に聞かれる。

盆踊りも射場で踊られ、葬儀の際には炊き出しの場ともなるが、日常では子ども達の遊び場であり、大人達の井戸端会議の場でもあつたらしく、ハレとケが混在する、ちよつと不思議な空間にも映る。



場射 式

Heritage of Onomichi Suburban Areas

吉和ベツチャー

～漁町の秋祭り風景～



【吉和】

幣多賀八幡宮の秋祭りは、現在では10月最後の日曜日（前日の土曜は宵宮祭^{よいみや}）に執り行われているが、かつては11月3日だった。

旧祭日は尾道市街ではベツチャー祭りで沸き立つが、吉和にも同じような祭礼風景を見る。

氏子町内を巡幸する神輿（大小2基）の先祓・先導役として、獅子頭と面をかぶったお伴が登場する。面は猿田彦（ベツチャーではショークー）とお多福で、古老の内にはお多福を「ベタ」（ベツチャーでは武悪面^{ぶあくめん}で呼称）と呼んだとも伝える。

猿田彦とお多福は竹の先を割ったササラ竹を手に持ち、沿道の老若男女の頭や肩を叩いてゆく。そして獅子は大きな口で人々の頭を噛む。幼い子供は泣き出し、大人達はその光景に笑い、また信心深く手を合わせる。

全体的に漂う簡素で素朴な感が、尾道町側との対比の上で印象深い。



ーヤチッペ和吉 参
Heritage of Onomichi Suburbar Areas



【吉和】

明治28年（1895）7月25日夜、糸崎から尾道へ向かう列車が、折からの暴風雨に見舞われて破損していた線路へ突っ込み脱線転覆。車輛の一部は海中に沈み、多くの死傷者を出すという大惨事が、三原市木原町との境に近い福地（吉和エリア最西端）で発生した。

列車は軍用列車で、日清戦争の戦地から帰還する兵士達が乗っていた。

列車は23輛編成でこの内10輛が機関車と共に沈み、16名が亡くなり、82人が重軽傷を負う未曾有の大惨事となり、中には海に流されて遺体の収容すら出来なかった兵士もいたという。

その後、事故現場の海上に火の玉が出没するようになり、故郷へ帰りつけなかった（遺体未収容の）兵士の霊を慰めるべく建てられたのが、線路と国道に挟まれて建つ「遭難軍人之碑」である。



遭難軍人之碑 四

Heritage of Onomichi Suburban Areas

05 蒸気機関車D51 422

【吉和】

古浜町の合同庁舎前に、蒸気機関車のD51、通称・デゴイチの勇姿が見え、その一角はデゴイチ公園として地元住民に昔から親しまれる。年季の入ったデゴイチは、尾道バイパスが全線開通した昭和47年（1972）の1月17日にこの地へやって来た。

デゴイチの誘致と設置に先頭に立って立ち回ったのは、この時の尾道市長で尾道大橋の架橋を早い内から提唱していた事でも知られる石原善三郎氏（1888～1989）で、前年の春に82歳で再び尾道市長へ返り咲いた直後の事だった。

当初は長江口の遊園地（現在は観光バス駐車場）に設置が構想されたが、二転三転の紆余曲折を経て現在の場所で安住したという経過になる。

車体の美化清掃奉仕が国鉄糸崎機関区の職員及びOBの手で行われるのも、その昔の風物詩的光景だった





224 15D 車關機氣蒸 伍
Heritage of Onomichi Suburban Areas



【久山田】

総事業費の4分の3に相当する103万5千円の寄付を、尾道出身で大阪の地で大成した大実業家・山口玄洞翁（尾道市名誉市民）より得て、大正時代の末に尾道市の上水道は敷設された。

久山田水源地（堰堤が国の登録有形文化財）には、記念碑と並んで玄洞翁の揮毫（きごう）になる碑も建ち、長くその遺徳が伝えられている。

水源地に面して建つのが尾道短期大学を前身とする尾道市立大学（開学当初は尾道大学）で、赤レンガ調の色合いにある校舎が水面に美しく映え、絵画作品に収まるような美観を見る。

昭和25年（1950）に国文科、翌年に経済科を開設し、後に経営情報学科を加えた短期大学として、長く市民に親しまれた。

平成13年（2001）に、日本文学科、美術学科、経済情報学科を擁する4年制大学へと一新し、今に至る。



景風ルアノ學大ト地源水田山久 六
Heritage of Onomichi Suburbar Areas

神秘と浪漫に満ちた大峰山

おおみねやま



【久山田】

水源地から見て北方、後ろを美ノ郷町中野と接する大峰山（標高289・6m）から、弥生時代に見る銅銕^{どうぼく}と銅劍^{どうけん}が出土したのは、昭和35年（1960）7月の事だった。

市の道路改修で用いる石材を切り出す石切作業中の事で、中細形の銅銕1口（長さ66cm）、細形の銅劍2口（一つは先端部分のみ残すのみで、一例は長さ32cm）が重なり合う礫塊^{れきかい}の間から発見された。また、近くからは弥生時代後期の土器片（壺の破片）も出土した。

調査した木下忠氏によれば、「山ないしは岩を神とあがめ靈器をささげ、祭祀を執行した古代人の習俗を想像することができる」として、原始古代祭祀の痕跡との見解を示している（『久山田町史』）。

大峰山は龍王山とも呼ばれ、古くは雨乞いの山であったという民俗伝承からも、その想像はより真実味を帯びてくるものがある。

山峰大タチ満ニ漫浪ト秘神 七

Heritage of Onomichi Suburbar Areas





【日比崎】

龍（竜）王山と呼ばれる山は多い。日比崎町から栗原の門田町に広がる山も竜王山で、住宅団地は竜王台と命名される。

こちらの竜王山にも信仰の痕跡が窺え、山の南側、日比崎中学校の裏手を登った先に、無数の石仏群が広がる。

大小の石に刻まれた像は神仏混在で多様にあるが、本体を成すのは石鎚権現いしづちごんげんで、四国伊予の石鎚山に発する神仏習合による山岳信仰の分祀をここに見る。

石鎚権現を始め、その表情は憤怒ふんぬの厳めしさを放つものもあるが、何れも円空えんくう仏のような素朴な造りから、ほのぼのとした愛らしさまでどこか漂わせる。

この信仰空間は大林宣彦監督による尾道三部作の一つ、富田靖子がヒロインを演じた『さびしんぼう』のロケ地ともなった。



群佛石ノ山王龍 入
Heritage of Onouéchi Suburban Areas



【栗原】

国道184号線に沿い、祇園橋を経て尾道水道へと流れる栗原川―元々は栗原本通り側に流れていたという歴史も遠い昔の昔話。その歴史を静かに伝えるのが、宮前橋手前（南側）の本通り沿いに建つ「栗原川改修記念碑」である。

本通りに沿って本四ビル西側の高架の位置へ流れた旧栗原川は、まとまった雨になるとすぐに氾濫を生じる天上川^{てんじょうがわ}で、それに応じて嵩^{かさ}上げされた堤防も限界に達するに至り、流路の変更、即ち川の流れを変えするという一大事業が着手される事となった。その発起は大正10年（1921）に遡り、当時は尾道と合併する以前の栗原村の時代であった。

着工までには長らく時間を要し、昭和4年（1929）4月に工事が始まり、同6年（1931）2月に完了する。

工事費用にあつては国・県からの補助を得ていないなど、まさに「プロジェクトX」並みのその舞台裏が察せられてくる。



碑念記修改川原栗 九
Heritage of Onomichi Suburban Areas

【栗原】

栗原川の流路変更史を伝える今一つに、記念碑から程近い宮前橋がある。

宮の前は栗原村の氏神・烏須井八幡神社（栗原八幡宮）の門前を示す通称で、バスの停留所名にもその名が見え、その昔にあつてはこの前を往来した尾道鉄道の停車駅の名前としても用いられた。

氏神様への参道入口に架かる太鼓橋を思わせる宮前橋だが、元々はここから遙か南の三軒家々天満町界隈に架かり、石橋以前は土橋であつたと伝える。

その往時（土橋）の姿は浄土寺所蔵の「尾道絵屏風」（安永^{あんえい}3年へ1774）尾道市重要文化財）の中にも描き出されており、西国街道の沿線上に位置する橋でもあつた。

西国街道時代の逸話として、水害で橋が崩落した際、参勤交代の行列を通す為に大急ぎで復旧させ、それが一夜の内という神業から一夜城ならぬ「一夜橋」との異名もあつたらしい。



橋前宮ノ橋夜壱 拾
Heritage of Onomichi Suburbar Areas

【栗原】

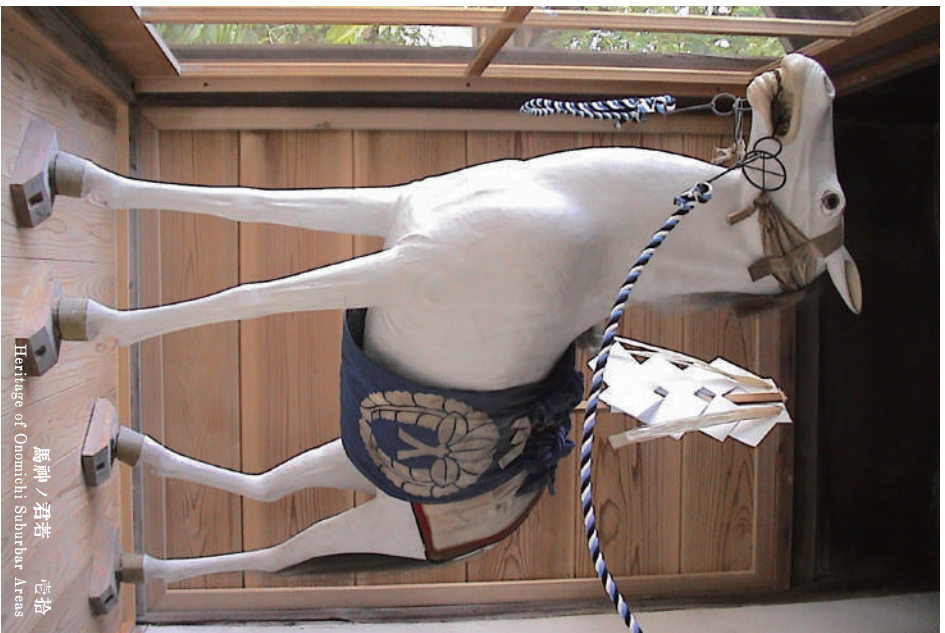
鳥須井八幡神社（栗原八幡宮）の隨身門ずいしんもん―その正面には、隨身像が左右で凛々しく構えるが、その裏側（社殿に向いた内側）に回ると、そこには白馬の像が左右に一対納まる。

白馬は神様の乗物として奉納された「神馬」で、古くは本物の馬が奉納されたが、後になるとこうした模造の馬が奉納されるようになった。

こちらの神馬、社殿から見て左手（東側）のものが、右手（西側）の像よりも造りが精巧で、古い印象を感じさせる。

傍らに置かれた由来文によれば、「此木馬は旧三原浅野家の所蔵品、当時若君の調馬に使用されたものなり」とあり、広島藩の支藩である三原浅野家ゆかりの品で、浅野の若君（人物は不明）が乗馬用具で使用したという来歴を秘める。材質については四肢がケヤキ、その他はクスの木になる。

昭和3年（1928）に氏子より寄進されたもので、寄進者と浅野家との関係は不明である。



馬神ノ君若 壹拾
Heritage of Onomichi Suburban Areas

自慢の学校ミュージアム

～栗原歴史民俗資料館～

【栗原】

市内の小学校の内には、地域の歴史・民俗を伝える資料を収蔵・展示する郷土資料室（館）を設けている所が多い。

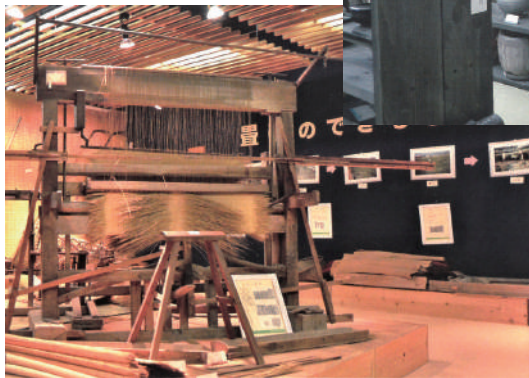
その中でも最も目を見張る質量を誇るのが、栗原小学校内に開設された栗原歴史民俗資料館である。

「地域を教材化する」というテーマのもとに、学校・育友会・地域が共に連携・協働して、栗原地域の内に残る歴史民俗資料、主には生活文化や地域の産業を伝える民具や生産用具などを中心に幅広く収集され、分類整理、目録化を経て、空き教室を活用する形で昭和62年（1987）10月に開館した。

数千点にも及ぶ資料は、3つの教室と廊下に分けて展示され、1号館では地域の産物だった蘭草栽培から畳表について、2号館では衣食住の生活用品、3号館では農耕具がまとめられる他、麦藁農家の囲炉裏端も再現されるという充実ぶりを見せる



拾 栗原歴史民俗資料館
Heritage of Onomichi Suburban Areas



【栗原】

栗原北部の大池前、国道184号線をまたぐ陸橋の東側のたもとに、石地藏が建つ。台座には天邪鬼^{あまのじやく}がユーモラスな表情を見せているが、ここではその手前に建つ石碑に目を向ける。

北側側面に刻まれた文字に「一寸まででんしゃはこぬか」とある。

ちよつと待て、電車は来ぬか…目の前を走るのは車やバイクであつて、電車の姿などはどこにも無い。

注意せよと促すその電車は、尾道駅と御調町の市^{いち}を繋いだ私鉄の電車・尾道鉄道であり、大正の末から昭和39年（1964）の7月末まで見られた、今となつては消えた鉄路になる。

こちらの碑は鉄道事故の犠牲者を慰霊する為に建立されたものになるが、元々は事故現場となった美木^{みき}中学校（美ノ郷町本郷）の下に建てられ、後に亡くなられた方の地元である栗原町竹屋の方へ移設されたとの事である。





カヌコハヤシンデマサ一 参拾
Heritage of Onomichi Suburbar Areas

14 サヤノタオのサイノカミ



【栗原】

大池から北へ進むと小池があり、この辺りが栗原と三成の境をなす峠の頂上部になる。

峠は「仙人峠」（せん に ゆう だ お）と呼ばれ、バス停の名前もその名にある。

昔話によると、仙人が峠に住みつき、町へ行こうとする者を監視する見張り番をしていた、そこから仙人峠となり、後に仙人峠へと転訛（てん か）したという。

「せんにゆうだお」（だおは峠の意）の呼称で馴染みの峠だが、栗原側からの呼称は「さやのたお」が本来であつたとは知らなかった。

「さや」は「さい」の転訛で、漢字で表すと「幸の峠」で、「幸」とは「幸の神」、境界に祀られ、災いの侵入を防ぎ、往来と道中の安全を見守る道祖神（どうそじん）を意味する。

幸の神を祀る小さな石祠（せきし）は、国道に面した元の位置から移動し、現在は松岡団地入口から少し入った竹藪の中に所在する。

すぐ傍に位置する小池も、古くは「さやのたお池」であつたらしい。



ミカノイサノオタノヤサ

四拾

Heritage of Onomichi Suburbar Areas

15 尾道の浦島太郎



【美ノ郷町】

亀を助けて海の底の竜宮へ至った若者。そこで美しい乙姫様おとひめとの夢のようなひとときを過ごす。やがて郷恋しく舞い戻るが、故郷の風景は変わり、そこに自分を知る者は誰一人として居ない…困惑する若者は乙姫様から貰った玉手箱へ手をやり、開けるとモクモクと煙が包み込む。煙が消え失せると、青年は年老いた翁へと変じていた……

桃太郎等と並んで有名な浦島太郎の昔話は、丹後半島の伊根町が発祥・根源として知られ、他にも同様な伝説を伝える土地が幾つか確認されるが、何と尾道にもその一例があった。

三成の養老温泉近くに鎮座する浦島神社がそれで、縁起に尾道版の浦島太郎が語られる。

尾道の浦島太郎は嶋子という名で、亀はサメで龍神の使いとして登場する以外は基本的なあらすじは同じ。

玉手箱開封と共に年老いて亡くなった嶋子を葬り、小祠を建てて祀まつったとも、竜宮から持ち帰った弁財天の像を祀ったとも伝える。



郎太島前ノ道尾 伍拾

Heritage of Onomichi Suburbar Areas



【美ノ郷町】

三体神輿の三体廻しとして知られるのは、尾道町内の夏祭りの一つにある祇園祭（久保新聞・八坂神社の例大祭）であるが、同様に三体の神輿が繰り出し、三体揃つての三体廻しの勇姿が市内北部に分布する。

その内の一例が三成の三体廻しで、同地の氏神社である三成八幡神社の秋の大祭において見る事ができる。

尾道町での三体廻しは海岸端に建てられた幟を軸に回転するのに対して、三成ではお宮の境内に設けられた土俵と呼ばれる廻し場でこれを演じる。

古老の伝承に、三成の三体神輿は、尾道祇園祭で使われた神輿が新調される際、古い神輿を譲り受けたものといい、その内の一体「二つ巴」の神輿が傷んでいた為、三成の地で宮大工によって修繕されたと伝え聞く。

本来なら八幡様が奉じられる三成の三体神輿ながら、そこでは祇園さんの神々がそれぞれに当てられるというのも、その言い伝えを傍証しているかのようである。

シ廻体三ト輿神体三ノ成三 六拾

Heritage of Onomichi Suburban Areas



17 乃木さんの山

【美ノ郷町】

三成学区の少年野球チームの名を、「三成乃木山クラブ」と称するが、乃木山とは三成小学校のすぐ西に広がる山の事で、別に二の宮さんと通称される艮神社が麓に鎮座する事から艮山の名も聞かれるが（本来的には艮山が古い名称と見られる）、地元の内では乃木山の名で広く親しまれている。

乃木とは、明治時代の軍人としてその名を広く知られる乃木大将こと乃木希典^{まれすけ}を意味し、山の頂上には花崗岩^{かこうがん}で造像された高さ2m程の乃木大将の像が建つ。

建立発起人は地元の板原庄松氏で、明治39年（1906）に第41連隊へ入営した板原氏は、第五師団検閲で広島入りした乃木大将と接し、軍務関係の質疑で大将から声を掛けられた事が、郷里への造像と乃木神社の創建へと繋がった。

像は昭和7年（1932）5月に設置され、別に小さな社祠^{しゃし}もあつて神社として整えられたが、今は鳥居や石灯籠等が残るのみとなっている。





Heritage of Onomichi Suburban Areas

山ノササ木乃 七拾

【美ノ郷町】

市内各地区に点在する公民館の中で、時代を帯びた洒落^{しやれ}た洋館建築で目を惹くのが、美ノ郷町本郷の旧道沿いに建つ藤井川公民館である。ここはご専門の渡邊義孝先生（一級建築士、尾道市立大学非常勤講師、尾道空き家再生プロジェクト副代表理事）の解説に耳を傾けよう。

「プラン（平面形状）がいい。西側に後補^{こうほ}らしい部分を取りついているが、見事なシンメトリー（左右対称）のコの字型。なぜか西側部分は外壁がイメチェンされちゃっているが、東側は当初のまま。黒々とした南京下見板^{したみいた}や、軒蛇腹^{のきしやばら}、名画の額縁を思わせる窓枠に囲まれた縦長の窓も、そして中央玄関部の瀟洒^{しょうしゃ}な庇の鼻隠しも、「正統派の近代建築」であることを物語^{ものがたり}る。大正から昭和初期の作らしい。あまり有名でないからこそ、見つけた喜び、そして「見つけてくれてありがとう」の思い（たぶん）も強かった」

—渡邊義孝氏筆

『尾道・近代たてものめぐり 第20回・建物を「発見」するたのしみ 藤井川公民館』

山陽日日新聞・平成23年（2011）11月22日付掲載より抜粋—





兼久堂かねひさどうと辻堂のある風景



【美ノ郷町】

辻堂つじやうとは、路傍に建つ小さなお堂で、一面に地蔵等の石仏を安置し、残る三面は吹きさらしの開放的なものになっているのが特徴で、4本柱から「四つ堂」、旅人の休息の場所ともなる事から「休み堂」、福山藩による地誌『福山志料』の編纂者・萱茶山かんぢやざんは「憩亭いこいてい」と命名するなど、呼称についてはその土地毎に異なる。備後地方にとりわけ多く分布すると聞くと、尾道市内でも北部から御調にかけてに多く集中するようである。

美ノ郷町中野の一例は、「兼久堂」と呼ばれ、前面に田圃、後背に山という里山風景の中に建つ。

お堂から北西方にある山には宝物の埋蔵伝説を秘め、その昔に宝を探しに一人の旅人が来着し、この堂にしばらく籠った。謎の旅人は堂に祀られた仏像の背中を少しずつ剥はぎ取り、葉のように煎じて飲んでいた等の奇譚きたんも伝える。

堂の天井に吊下げられた輿こしは練習用に作られた神輿になるが、今は使用されていない。

Heritage of Onomichi Suburban Areas

堂久兼 九拾





【美ノ郷町】

中野の兼久堂から更に集落の奥（北方）へと進むと、山々に囲まれた谷に広がる、見事な棚田の風景を見る事ができる。

棚田とは、山間の斜面や谷間において階段状に築かれた水田であり、里山の美観を形成する風景遺産である。

中野の登迫集落に見る棚田は、かつては数軒の農家によって耕作されていたが、現在では藤原喜隆さん・のり子さんご夫妻の一軒だけが守り続けている。

棚田全景はもとより、ここでは棚田を支える石積み・石垣にも着目され、不整形に積み上がった「野面積み^{のづみ}」の風景は、里山アートと呼びたくなるほどの芸術性と美しさを感じさせるものがある。

棚田全景は高い位置から見下ろすのが当然良いが、この石積みの景にあつては、逆に下から見上げるのが良く、壮観な眺めである。



尾道鉄道第4号トンネルの遺構

【木ノ庄町】

栗原の「一寸まででんしゃはこぬか」で紹介した尾道鉄道ゆかりの遺構は、今も沿線各所で拾い出せるが、最も大きな遺構として知られるのが木ノ庄町木門田、国道184号線沿いの東側に見えるレンガ積み第4号トンネル（隧道）の遺構である。

尾道鉄道沿線のトンネルは木ノ庄町の石畦いしぐさから御調町の諸原の間に合計8つあり、それぞれ1号から8号と呼ばれた内の一つ。

その内で現存するトンネルとしては他に1号・2号、7号・8号があるものの、何れも道路用に拡張されるなど改変されている為、当時の姿を留めるのは4号トンネルが唯一となる。

緩やかにカーブするトンネルの総延長は約80mで、レンガ（積み方はフランドルヘフランス）と石を組み合わせた造りは重厚さを感じさせる。

かつて市議会で文化財にしてはとの声も上がったが、頓挫したまま今に至る。





尾道鉄道第四號ノルネ構造 廿拾一

Heritage of Onomichi Suburban Areas



【木ノ庄町】

木ノ庄町市原いよかねの伊予兼集落も、中野に同じく長閑な里山風景を見る事ができるが、こちらにも風情を醸し出す民俗的風景が静かに佇むたたず。

グループマップでは「市原の辻堂と常夜灯」としてその地点を示すものがそれで、道と道が交差する、まさしく辻の一角に建つ辻堂に、すぐ傍に建つ常夜灯との組み合わせが、しばし足を止めさせる風景である。

辻堂の方はここでは「四つ堂」又は「茶堂」と呼ばれ、その昔に尾道市教育委員会が収集した伝承によると、明治時代に発生した百姓一揆の際、お堂の前で茶を出したとの逸話もあるようだ。

常夜灯は金毘羅こんぴら大権現（四国讃岐の金刀比羅宮）と刻むいわゆるコンピラ灯籠で、刻銘から安政7年（1860）3月の造立で、尾道石工の小七郎の作になる。

灯籠のてっぺんに配された玉乗りの獅子が、凛々しくもあり可愛らしくもある。

灯夜常ト堂辻ノ原市

式拾弍

Heritage of Onomichi Suburbar Areas



【木ノ庄町】

原田方面行きのバスに、「瓦焼」という路線を見かけ、木ノ庄町木梨にそのバス停を見るが、瓦焼とは瓦を焼く、即ちこの地で瓦が生産されていた事を意味する。

その瓦を焼いた工場は、木梨の内の「行実」ゆきざねという地で、同地で農業を営んでいた京泉伯夫さん・菊子さんご夫妻が、満州開拓から帰られた後の昭和26年（1951）に始められた。

その始まりは、「菊間瓦」で知られる今治菊間地区の瓦職人の兄弟がこの地を訪れ、赤茶色をした同地の土は焼いてもひわったりせず、瓦を焼くのに最適であると推奨した事に端を発し、以来、この兄弟の指導を受けて瓦生産が着手される事になった。

木梨川沿いにある「川のほとりの小さなぎやらい」は、京泉さんのご家族が開くギャラリー喫茶になるが、その店先の傍らに並ぶ瓦の多くは、瓦焼の歴史を伝える忘れ形見である。





里ノ焼瓦 参拾茂
Heritage of Onomichi Suburban Areas

神秘なる摩訶衍山まかえんざんとその眺望

【原田】

山深い原田の里を見下ろし、遠くの眼下に瀬戸内海を見渡せるのが標高382mの摩訶衍山で、山頂には摩訶衍寺（曹洞宗）が建つ。

同寺は奈良時代の天平年間（729～749）に、名僧行基ぎょうきによって開創との縁起えんぎを伝え、33年に一度の開帳、17年に一度の半開帳となる秘仏の十一面観音（国の重要文化財）と千手観音（国の重要美術品）を蔵する古刹こせつである。

山には雨乞いの龍王山としての信仰が古くあったようで、山頂には降雨を祈った竜王社が見られる。

神と仏が交わる神聖且つ神秘的な山には、「夜の虹」という、闇夜に大きな虹が現れたという伝説も聞かれる。

そこでは虹と共に真つ赤な顔をした天狗が黒雲に乗って矢のような速さで飛んで来て、摩訶衍山後方の山に降りたといった話もあり、天狗を山伏の姿と見ると、修験しゆげんの山としての痕跡も匂われてくる。





望眺ノソト山衍訶摩ルナ秘神 四拾弍

Heritage of Onomichi Suburbar Areas

25 郵便配達夫の殉職碑



【原田】

殉職と言うと、危険を伴う警察や消防の公務においてが思い浮かぶが、郵便配達での殉職碑となると些か珍しいのではないだろうか。

原田町梶山田の旧道沿いに建つ殉職碑がそれで、碑文の冒頭に刻まれる「伊藤嘉六君」が殉職した原田郵便局所属の郵便配達夫になる。

大正2年（1913）2月11日、風雪の中を集配業務に従事していた伊藤氏は、途中で力尽き、やがて凍死した。責任感の強い人だったといい、それだけに途中止めする事なく集配に当られた結果の殉職だったようだ。

その死を悼み、また、公務に邁進した功労を称えて殉職碑の建立が發起され、これに尾道と広島の郵便局長も發起人に加わって、一周忌を迎える翌年に建碑された。

原田の三体神輿と三体廻し



【原田】

尾道祇園祭に見る三体神輿と三体廻しが、農村地帯の尾道北部にも分布する事は三成で紹介したが、他に原田にも見られる。※：他に木頃八幡神社の祭礼にも見られたが現在は見ることが出来ない。

原田町梶山田に鎮座する氏神社（旧梶山田村の氏神）・すぎはら楹原八幡宮の秋祭りで繰り出す三体神輿は、「本当」、「二当」、「三当」と呼ばれて、町内3地区（梶下・上小味下小味・梶上）で分担して奉仕される。

それぞれの神輿は各地区を出発して町内を練って八幡宮へ集まると、境内にて三体揃っての三体廻しが始まる。

その軸点は三成に同じくこちらも土俵で、円形の土俵上で尾道町内に見るのと同様な勇壮な三体廻しが繰り広げられる。

コロナ禍を経て4年ぶりに通常形態へ戻った令和5年（2023）には、地域の尽力により神輿の補修もなり、装いも新たに原田の三体廻しが披露された。



【原田】

尾道旧市街（中心市街）の学校統廃合により、残された空き校舎の取扱い、その利活用が課題となってくる中であって、その先駆として改めて着目されるのが旧原田中学校の校舎を再生させた原田芸術文化交流館、愛称（通称）「やまそら」だろう。

旧原田中は少子化により平成26年（2014）に閉校。廃校後の跡地を利用して、原田出身の彫刻家・矢形勇^{やがたいさむ}の作品展示から、町内に多い芸術家達の作品の展示と販売、原田の歴史・文化を掘り起こし、紹介する郷土資料室といった文化発信の拠点として、翌27年（2015）4月より再スタートが切られた。

施設は芸術文化の枠にとどまらず、お洒落なカフェも開かれる他、子どもからお年寄りまでが集えるスペースとして、定期的な催しも豊富で、また、レンタルスペースとしても一般に貸し出されるなど、町内外の人が交わる地域拠点として、参考にされるところが多い。



アメリカキササゲ

【原田】

アメリカ南部を原産地とし、イギリスに次いで明治時代の終わりに日本へ渡って来たノウゼンカズラ科の落葉高木が「アメリカキササゲ」である。

原田町おぼら小原、県道府中松永線沿いの小川に、この珍しい木が見られる。

小原の後藤禄治という人物が、明治後期に当地へ植えたものが枯れる事なく、今も生き続けているもので、戦争と2度行われた工事もくぐり抜けて奇跡的に残ったものという。

そうした経過から、これを地域おこしに出来ないかと地元有志が県立林業技術センターや広島植物公園へ依頼して調べた結果、国内での自生は珍しいアメリカキササゲと判明した。

平成15年（2003）には守る会も結成され、案内看板も設置されている。





正直者の民話を伝える金鶏岩^{きんけい}

【西藤】

西藤町の下西地区には、「金鶏岩」と呼ばれるどこか風変わりな岩が見られる。

昔昔の事、岩の近くに大木次郎というそれは働き者の若者が住んでおった。

年老いた両親と弟や妹の為、日々懸命に働き通していたが、暮らしは一向に楽にはならない。

ある正月の事。次郎が氏神様に詣でた折じやった。「お賽銭一つも無い…」と溜息混じりの言葉を口にした次郎は、鳥の鳴き声を耳にした。空耳かと思っていると確かに聞こえる。その鳴き声は岩から聞こえてくる。近づいて見

ると1羽の白い鳥が金の尾をなびかせ、岩から空高く舞い上がった。その岩陰にはお金があるではないか。これで正月餅や着物も買える…と思った次郎じゃったが、金は全て氏神様の賽銭箱へ投じた。そうしてそれから真面目に働いた次郎の家は、次第に裕福になつていった。そして岩はいつしか金鶏岩と呼ばれるようになり、正月に岩の鳴き声を聞けば、縁起が良いという事じゃ。







【西藤】

尾道に見る祭礼を地域別に見渡してみると、農村部の北部は鉦太鼓が広範囲に分布し、市街の都市部は神輿が花形にあり、島嶼部は船を用いたものとだんじり（山車^{だし}の一呼称で、西日本によく聞かれる）が特色として指摘される。

市内の祭礼でだんじりを見るのは因島・瀬戸田に多いが、本土側では西藤にも確認される。

旧西村（西藤町）と東村（現福山市）の氏神社である八幡神社（通称・東西神社）の秋祭りに神輿と共に引き出されるだんじりは、明治38年（1905）頃と次いで大正3年（1914）に建造・補修をされたものと伝え、部分的な組み立て式となっている。

だんじりの台上には人形等が飾り立てられ、記録写真では遠山の金さんや徳川将軍、七福神、収蔵庫には宮本武蔵の立て札と人形の頭部が残される。

だんじりは3年に1度の周期で登場し、次は令和6年（2024）の祭礼で予定されている。



リジンダノ藤西 拾参

Heritage of Onomichi Suburbar Areas

防地峠ぼうじの藩境碑

【高須・久保】

江戸時代、各藩の国境を往来する人々を監視した番所の現存遺構は全国に僅か3例しかなく、一つは土佐藩の立川番所（高知県長岡郡大豊町）、もう一つは丸亀藩の番所（香川県三豊郡豊浜町に所在したが高松市内移築）で、そして今一つが尾道市高須町の西端、久保町との境、防地峠の上に位置する防地番所跡になる。

防地番所は広島藩と福山藩の藩（国）境番所で、広島藩側の遺構は残らないが、東の福山藩側の建物遺構が現存している（個人所有）。

番所建物の特徴は平屋で横に長いところで、これは往来する人々を良く見通す為という。

防地番所の建物は、後の時代に人が暮らす住居として利用されたがやがて空き家となり、老朽化を見えるようになった。

平成の半ば頃から保存運動が始まり、文化財としての調査も見られたが、文化財指定には至っていない。

傍を走る道路を挟み、東西にそれぞれの藩境を示す記念碑が建つ。





かさがみさん

【高須】

おできや腫れ物といった皮膚病にご利益ありと信仰されるのが「かさがみさん」であり、漢字では「瘡神」と書く。

防地峠を越えて高須町大山田集落を進んだ先に、かさがみさんのお社（正式には大己貴神社^{おおなむち}）が祀られ、歳末にある祭礼には、遠近問わず参詣客で賑わう。

その神域（境内地一帯）には大きな池（瘡神池）もあって、秋の頃は紅葉に染まる隠れた憩いのスポットでもある。

その昔には湖畔に宿も設けられ、信仰と遊興織り交ぜた楽園的景観が形成されたのが、この瘡神公園（高須公園とも）だった。

楽園の整備は大正時代の初め頃に遡り、松山の宗教家が発起し、京都の呉服商がパトロンとなって進められたと伝える。

しかしその宗教家が芸者遊びで散在し、パトロンが激怒して途中止めに終わったという。

社殿の周りには磐座^{いわくら}を彷彿とさせる巨岩が鎮まり、神秘的な雰囲気濃厚に漂わせている。





Heritage of Onomichi Suburban Areas

シサミガサカ 式拾参

【高須】

高須町内の横浜地区に、「恋の水」と名付けられたスポットがある。名前からすると恋愛・縁結び辺りのスポットを想像してしまうが、こちらの恋はそうではなかった。その由来として次のような伝説が秘められる。

江戸時代の参勤交代で、九州の薩摩藩一行が高須村を往来した時の話。薩摩藩主・島津義久が喉の渇きを訴え、お伴の家臣が附近から水を求めて差し出した。

それから今津村へ入った一行だったが、義久は熱病に罹り、^{かか}庄屋宅で寝込んでしまう。

この時、病に伏す義久はしきりに水を求め、家臣は村の内から汲取った水を差し出すが、受け付けない。義久は高須村で飲んだあの水が飲みたいと大変恋しがった。それから「恋しい水」と呼ばれて広く知られるようになり、後に「恋の水」に変わったのだという。

傍らの祠は高須町内のお大師さん、即ち八十八か所の一つになる（25番札所）。





水ノ恋 参拾参

Heritage of Onomichi Suburban Areas



【高須】

高須町太田地区の高台に所在する福善寺（真言宗）は、木梨の鷲尾山城に拠った杉原（木梨）氏と同族になる高須杉原氏ゆかりの寺で、同氏の居城であった松尾山城が所在した松尾山の麓に古くは位置したと伝える。

山門をくぐって境内左手を見ると、随分と背の高いお地藏さんが建っている。

その高さ1m54cm、市内では恐らく最も背の高い石地藏ではないかと目されるこちらのお地藏さんは、子どもの病氣平癒や勉強にご利益ありと篤く信仰されているようである。

尾道浄土寺の境内東端にも、同様な背高のお地藏さん（石造の延命地藏）が祀られているが、こちらのお地藏さんが高須福善寺へ安置されるはずだったが、途中に寄った浄土寺が気に入られ、ここに留まる事を希望したので、高須には別にもう一つの背高地蔵が行かれたという昔話もある。



Heritage of Oomichi Suburban Areas

ソウ蔵地オチボツノ

四拾参

【高須】

東尾道のおのみちバスと消防局に隣接する公園の内に、石造りのなかなか立派な祠が見られる。

この石祠は干拓造成された高須新涯（高西町を一部含む高須南部のエリア）築造の歴史に関わる遺構になるとは、殆ど知られていないのではないか。

高須新涯は戦国時代の天正年間より江戸時代を経て、明治までの長い年月をかけて築造された歴史を秘める。

石祠の背面には、地主の寄進により明治36年（1903）にこれを建てるとあり、手掛けた石工の名には寄井弥七とある。この地主が高須新涯の地主になるらしく、元は別な場所に建てられ、後にこちらの公園へ移されたらしい。

石祠を造立した石工の寄井弥七は、市の石造物調査によると明治25年（1892）～昭和12年（1937）の間で33点の事例が確認され、代表的な尾道石工の一人になるという。

高須新湊ト彌七ノ作石祠 参拾伍
Heritage of Onomichi Suburban Areas





【山波】

山波の昔話より。その昔、久山田村から山波村へ奉公に來た青年が、奉公先の娘と恋仲になった。が、娘の両親がこれを認めず、ガックシ肩を落とした青年は、娘を諦め久山田へ歸る事にした。

峠道の大きな松の根元に腰かけた青年は、娘の顔を思い浮かべて思案にくれた。松の傍にはお大師さんのお堂があり、青年はそこで二人の仲が成就する事を祈った。

どれぐらいの時間が経ったろうか。気が付くと青年を呼ぶ声が聞こえてくる。見ると青年を追って來た人々の中に娘の両親も居る。聞けば青年が出て行ってから、娘が口も聞いてくれなくなった。そこまでの仲なら……

かくして二人はめでたく結ばれ、大師堂のお地蔵さんのお蔭と篤く信仰するようになった。

以来、縁結びに御利益ありと知られ、地蔵は「思案地蔵」、峠の坂道を「思案坂」と呼ぶようになった。



藏地案思ノビ結縁 六拾参
Heritage of Onomichi Suburbar Areas



大歳丹波神社の磐座ださいたんば いわくら

【山波】

思案地蔵のある峠を大橋の方へ下った先に、丹波稻荷のお宮が建つ。

境内にある石碑に刻むところでは、丹波稻荷神社であると共に、大歳神社でもある事が分かる。

「大歳」は「おおとし」でなく「ださい」と呼ばれ、「ださい」は「太歳」と表記される場合が多いが、ここでは「大歳」と書いてこう呼ぶ。何れの表記であれこの神は穀物を司ると共に年神様としがみと見なされ、その年の最大吉方位である恵方えほうに居るといふ歳徳神としとくじんとも見なされる。

江戸時代に編まれた地誌の一つ『備陽六郡志びようろくぐんし』には、山波村の大歳神にまつわる奇譚を伝え、そこでは忠海や大崎下島の御手洗みたらいから船でやって来た遊女達ゆうじよの秘話も聞かれて興味深い。

更に興味を惹くのは社殿後背にどつかりと構える巨岩で、注連縄しめなわが張られてまさに神宿る磐座の一例を見る事ができる。





座磐ノ社神波丹歳大 七拾参
Heritage of Onomichi Suburban Areas

海が見える、海が見えたの風景

【山波】

「海が見えた。海が見える。五年振りに見る尾道はなつかしい。汽車が尾道の海へさしかかると、煤^{すす}けた小さい町の屋根^{ちようちん}が提灯^{ちようちん}のように、拡がって来る。赤い千光寺の塔が見える。山は爽やかな若葉だ。緑色の海向うにドックの赤い船が、帆柱を空に突きさしている。私は涙が溢れていた。」：

尾道ゆかりの作家・林芙美子の代表作『放浪記』の有名な一節。

この情景は、山波の造船所（尾道造船）を過ぎ、大橋へ差し掛かるカーブを越えると広がる車窓風景になるが、旅人であれば尾道へやって来たんだと実感させ、遠方から帰郷する人であれば帰って来たと、ホッとさせられる光景ではないだろうか。

写真は千光寺下に建つ「みはらし亭」より、芙美子が涙したその風景を俯瞰^{ふかん}してみたものである。

表紙で用いた写真は、時代的に芙美子の見た風景に近い。



景風ノタエ見ガ海、ルエ見ガ海 八拾参

Heritage of Onomichi Suburban Areas





【尾崎本町】

尾道大橋と新尾道大橋の尾道側橋脚下の海岸端に、小さな石の祠ほこりが祀られている。

尾道水道をすぐ目の前に祀られるのは水辺の神様として知られる龍王さん（龍神）で、別に土地の神様との意味で「地主じお」さんとも呼ばれ、神社としては貴船神社きふねになる。

最近は見られないが、かつては栗原の向峠むかしやうとうげ町内会有志が鉦太鼓を打ち鳴らして龍王祠の祭礼に参り、大橋下でこれを奉納するという光景も見られた。

その当時の地元紙報道に古老の証言が載り、戦中は中断していたが戦後は復活し、40年間に2回の奉納があったという。

古い時代には海上に出た岩の上に祠が設けられていたが、祠が海へ転落した為、現在の場所へ移された。

浄土寺山裏手の蛇ヶ池じやがいけの龍王さんは、尾道水道を経て天上へ昇った。その地点の海上に石垣を築き、龍王社の祠を建てたと伝わるが、こちらがその祠である。

シサ王龍ノ下橋大 九拾参
Heritage of Onomichi Suburbar Areas



沖の観音 （尾道のモンサンミッシェルの風景）

【浦崎】

東に境方浜と常石造船を望む浦崎の東南海上に、小さな小さな島が見える。小島は浦崎島というが、「沖の観音」と呼ばれる事の方が多い。

島には瓦葺の立派なお堂が建ち、こちらに沖の観音と通称される観音様（石造の十一面観音菩薩）が祀られている。

沖の観音は地元漁師の網にかかって海中より引き揚げられたと伝わり、一度は海へ返すも後日再び網にかかり、霊異を感じて祀る事になったという。江戸時代に編まれた備後地誌『西備名区』^{せいびめいく}には、「海老嶋」^{えび} 観音堂 水野候御建立」とあって、福山藩主の水野家によって建立、後に修復との縁起もある。

「海老島」という別の呼び名もここに知る。

海老とは同地の地名で、海老集落の海浜から引き潮の時は洲が現れ、沖の観音の小島へ渡る事が出来る。





41 満越みちごえ厳島神社の海上鳥居

【浦崎】

宮島さんの海上鳥居に因んで、同じ厳島神社で海浜部に鎮座する所にあつては、同様な風景を目にする事が多く、本シリーズ中で見てきたものでは、岩子島厳島神社、生口島では宮原港近くの厳島神社があつた。

浦崎の満越港近くに鎮座する厳島神社も、鮮やかな朱色が波間に映える海上鳥居が建つ。

同社の縁起によれば、宮島厳島神社に参詣する後白河上皇一行の船が、戸崎沖で潮待ちした折、上皇がこの社に詣でたと伝える。宮島参詣の帰路にも寄られた上皇は、「御鏡二面」を奉納した。それを御神体として奉じるという。

満越はまた考古学の上では瀬戸内海最大規模の製塩遺跡とされる「満越遺跡」の所在地でもある。

尾道市教育委員会が昭和57年（1982）から実施した調査で、製塩炉が20カ所も確認された他、併せて古墳時代の製塩土器片が多量に出土している事でも知られる。



居島上海ノ社神島巖越満 壹拾四
Heritage of Onomichi Suburbar Areas





【浦崎】

尾道に見る神楽は、里山から島嶼部までその数は多い。文化財指定（無形民俗文化財）では、県指定の御調神楽、因島の中庄神楽、瀬戸田の名荷神楽、市指定では山波神楽と田熊神代神楽が知られるが、浦崎地域に見る神楽―浦崎神楽もそれらと並び得るものが多分にある。

浦崎神楽の起こりは、明治の初め頃、上組地区の有志が神楽に造詣の深かった戸崎の神官よりその伝授を受けた事に始まり、それが地区を越えて、また時代を越えて受け継がれた。

しかし戦争の分断によつて戦後は担い手不足に陥り、各地区に見られた神楽団も僅かなものとなった。これを憂いて再起が図られ、各地区に保存会が組織される事になり、今に8つもの神楽団を見る。

氏神社の住吉神社の秋祭りでは8団体が競演して、深夜にまで及ぶ神楽の一夜を堪能することができる。



「いくさんど」の山と 「めーてー」の石

【百島】

百島の北西部に標高155・4mの軍殿山ぐんどのやまがある。軍殿と書いて「いくさんど」と呼ぶ、何とも変わったその山は、神功皇后じんぐうこうごう、次いで豊臣秀吉の伝説を秘める。

『古事記』や『日本書紀』が神功皇后の事績として記す朝鮮遠征の折、皇后はこの山の麓にある岩を前に、戦に勝利するならば岩を斬らし給えと祈り、剣を振り下ろすと岩は見事に斬れた。

次いで戦国の世「秀吉の朝鮮出兵（文禄・慶長の役）の折、百島で皇后の故事を聞いた秀吉は、縁起を担いでこの山に戦の神として「軍殿様」を奉祀した。その日が旧暦の6月1日であった事から、以来祭日として定まったと…。

この朝鮮出兵に、百島の男性も従軍したが、蔚山ウルサンで戦死してしまう。それを嘆き悲しんだ男性の妻が伝説の岩から身投げをし、それから岩は「女夫岩めおと」と呼ばれるようになった。岩は現存せず、地名としてのみ残るといい、岩は「めおと」岩と呼ぶところ、島の古い住民は「めーてー石」と訛なまって呼ぶのが常という。





山殿軍 参拾四

【百島】

離島である百島を繋ぐ海上交通として、カラフルな船体が海に映えるフェリーと高速艇、別に海上タクシーもあるが、年季の入った木造船の「百島丸」も、島民の生活物資を運ぶ船として、長く親しまれる存在にある。

他に渡海船とかいせんと呼ばれる同様な小型の運搬船として

「のぎ丸」が百島と本十間を繋いでいたが、こちらは平成3年（1991）に姿を消した（廃業）。

命を繋いだ船として、忘れてはならないものに救急船「旗正丸」はたしやうもあった。

島民の旗手正守さん（故人）が昭和47年（1972）から平成20年（2008）まで36年間従事された救急船は、24時間常勢は勿論、台風警報で定期船が欠航しても出動した、まさに命懸けの仕事だった。

旗手さんの救急船以前にあつては、海上保安部から船を出してもらつたなどし、また、桟橋に搬送船が着けられず、沖まで別の船で繋ぐ事もあつたりと、時間を要す事で救える命が救えなくなる事も多々あつたと聞く。

＊・・・現在は尾道市消防局の船がその役目を引き継ぐ（写真左、右はフェリーの百風。）」



Heritage of Onomichi Suburban Areas

参考資料 ※刊行順

◆図書

- 『心のふるさとシリーズ第二集 郷土の宮』山陽日日新聞社、1969
- 青木茂編著『新修尾道市史・第一巻』尾道市役所、1971
- 『心のふるさとシリーズ第五集 郷土の石ぶみ』山陽日日新聞社、1973
- 『久山町史』同編集委員会、1980
- 小畑正雄編著『浦崎村史』、小畑正雄、1984
- 岡田三郎著『古里の証』、岡田三郎、1984
- 『尾道の民話・伝説』尾道民話伝説研究会、1984・2002（新版）
- 『吉和町誌』同編集委員会・同編纂委員会、1986
- 得能正通編『備後叢書・第一巻（備後六郡志）』東洋書院、1990
- 得能正通編『備後叢書・第三巻（西備名区）』東洋書院、1990
- 『広島県神社誌』同編纂委員会・広島県神社庁、1994
- 『ふるさと百島』百島ふるさと文化史研究会、2002
- 『ふるさと百島 くらしとつながり』百島ふるさと文化史研究会、2004
- 『高須村・尾道市合併50周年記念 高須知っておきたい今昔マップ』高須地区協議会、2005
- 前田六二編『資料にみる栗原と栗原川の今・昔』前田六二、2008
- 『タイムスリップ・ルール・オノテツ尾道鉄道データファイル』尾道学研究会、2011
- 『郷土誌三成』三成学区の歴史と自然を訪ねる会、2012
- 『日本遺産調査報告書 尾道の石造物と石工』尾道市歴史文化まちづくり推進協議会、2016
- 『原田探訪ガイドブック』同編集委員会・原田町歴史・文化同好会、2018
- 林良司編著『オノテツの車窓から一時空を旅する尾道鉄道沿線紀行』尾道新聞社、2021

◆紀要・雑誌

- 尾道短期大学校友会歴史研究部「栗原川改修をめぐって」『歴史研究・第9集』所収、1967
- 八幡浩二著「尾道乃木神社―その概要と創建背景について―」
『芸備地方史研究・第二四四号』所収、
芸備地方史研究会、2005
- 尾道市立大学伝承文化研究会「平成23年度 24年度久山田調査研究報告」
『尾道市立大学地域総合センター叢書7 尾道学の可能性』所収、
尾道市立大学地域総合センター、2014

◆その他の資料

- 『郷土山波〈地域学習資料〉』山波小学校郷土クラブ
- 『栗原歴史民俗資料館』（案内リーフレット）
- 『瀬戸内しまなみ大学 わが島の自慢マップ 百島・尾道編』島（じま）ん倶楽部、2004
- 『尾道近代たてものマップ 近代化遺産探訪ガイド』渡邊義孝（文・絵）、
尾道ユネスコ協会、2011
- 小林仁「郷土・西藤（下西）の歴史文化について」2017
- 『原田文化』第136号及び第142号、原田町歴史・文化同好会、2023
- 『山陽日日新聞』
- 『尾道新聞』
- ◆ホームページ
国立研究開発法人森林研究・整備機構 森林総合研究所九州支所 2023年11月閲覧

尾道文化遺産マップ5

絵葉書帖「旧尾道周辺部」編

表紙写真 山波のカーブより市街眺望 明治後期～大正頃 尾道市蔵

写真・編集・デザイン

西川 真理子（尾道チャノマ図案室）

写真提供

尾道市文化振興課（No. 03・11・12・16・36・37・42・43・44）

神田 誠（No. 26）

西藤町下西町内会（No. 30）

制作協力（アイウエオ順）

大崎 多久司（栗原歴史教室）

尾道市百島支所

川のほとりの小さなぎやらしい

小林 仁（西藤町下西町内会）

砂田 信行（吉和の生活を記録する会）

旗手 憲一（尾道市百島支所）

平岡 顕（原田町歴史・文化同好会）

藤原 一雄（三成学区の歴史と自然を訪ねる会）

槇原 俊司（三成学区の歴史と自然を訪ねる会）

八幡 晴男（三成学区の歴史と自然を訪ねる会）

企画・制作・発行

尾道文化遺産塾実行委員会

事務局 尾道市企画財政部文化振興課

発行年月日 令和六（二〇二四）年 三月

文化庁「地域文化財総合活用推進事業」助成



Post Card



きかは便封

